

中国史上の皇帝たち

小林 晃

・皇帝とは？

秦の始皇帝が創始した中華世界の統治者の尊号、前 221 年～1912 年に中国に存在

秦以前の中華世界では皇帝ではなく王の称号を用いていた 例：殷の紂王 周の武王

周王朝の権威が低下すると、春秋時代を勝ち残った七つの大国＝戦国の七雄全てが自らを王と名乗ったため、中華を統一した秦はそれを上回る称号を使おうとした

伝説上の三皇五帝を上回るものとして皇帝号が発案された、三皇には色々な説があるが、司馬遷の『史記』は天皇・地皇・泰皇を挙げる

→始皇帝が宰相たちに新たな支配者の称号をどうするか相談したとき、宰相たちは泰皇を提案したが、始皇帝は泰皇の皇のみを残し、帝と合わせて皇帝とした

帝という言葉はそれ以前から存在し、祖先を尊崇して呼ぶ際に使用されたほか、天上の最高の神の昊天上帝（天帝）を呼ぶときにも使用（皇帝は「煌煌たる上帝」の意味か？）
皇も帝も天を意味する言葉、秦以前は王のことを帝子（天子と同じか？）と称していた

皇帝は自分のことを朕と称し、命は制（皇帝の命令一般）、令は詔（臣下が審議し、皇帝が裁可して下された文書）と称することも決定→後世に継承

→王の妃を后といったため、皇帝の妃を皇后、母親を皇太后というように

・天子と皇帝

もともと皇帝と天子とは異なる言葉として厳密に使い分けられていた（先代皇帝の死後、新皇帝がすぐに即位し、天子として天命を継承したことを天に報告＝2段階の儀式）

天が有徳者を天子に任じて地上の統治を委任する：天下の公共性＝周以来の天命思想

↓ 本来は別物で互いに矛盾

実力で天下を従えた唯一の絶対権力者の皇帝、帝位はその私的な血統に世襲される

国家の支配理念となった漢代の儒教が、祭天儀礼で王朝創業者を天とともに祭り、天命を受けた天子としての自己と、創業者の子孫として皇帝を継承する（＝孝の行為を行う）自己とを一体化、皇帝と天子とを同一視させる理論操作

・皇帝に関する諸制度

皇帝の存命中、臣下はその皇帝のことを今上や陛下と呼ぶのみ（皇帝は唯一の存在）

文帝や武帝といった呼び方はその皇帝の死後につけられた諡号（^{しごう}諡^{おくりな}）による

→ただし諡号は後世になると長大化、例えば南宋の高宗の諡号は「受命中興全功至徳聖神武文昭仁憲孝皇帝」、これでは皇帝の先祖を称するのに不便

唐代からは死去した皇帝を廟号（^{びょうごう}廟号（先祖を祀る廟に置く位牌での名前））で呼ぶ慣例

→例：太祖・太宗・肅宗・世祖・光宗・寧宗など・・・祖や宗がつく称号が廟号

皇帝の本名＝諱（^{いみな}諱）：呼んではならないし、書いてもならない、似た字も不可＝避諱（^{ひき}避諱）

→隋代以降の中国社会で不可欠となった官吏登用試験である科举では、皇帝の諱やそれに関する避けるべき文字を答案に使うと不合格となり処罰された

→後世では、年代不明の古籍や文書の出版・書写の時期を特定する上で、その古籍・文書がどの皇帝の諱を避けているのかが目安の一つとされた

元号の制度：漢の武帝が創始（前 113 年頃）、吉祥を感じさせる漢字を組み合わせ、自分の治世の特別さを演出、それ以前の皇帝にも元号はあったが、それまでの年数のカウントをリセットして再び元年から数え始めること＝改元

→例：漢の文帝は前 180 年で即位＝文帝の元年、前 163 年に改元＝文帝の後元年

→武帝は長寿で 11 回も改元、5 番目の五元 4 年（前 113）に宝鼎（^{ほうてい}宝鼎）を入手、記念して五元を元鼎と改称、さかのぼって初元・二元・三元・四元をそれぞれ建元・元光・元朔・元狩と改称＝元号の開始 以降の改元＝元号を定めて元年とすること

→後世では、王朝や皇帝を名乗る勢力が登場すると全て独自の元号を制定、別の王朝勢力に降伏した場合は、自分の元号をやめて相手側の元号を使用

→伝統中国では、皇帝・天子は時間を司る存在、現在でも臣下となることを「正朔を奉ずる」というのは、その王朝の正と朔（正月と毎月の一）に従うという意味

一世一元の制：明代以降に確立、一人の皇帝に一つの元号のみを使うことが制定

→明代以前は慶事や災害が生じると改元することがしばしば見られたが、我々は明代以降の皇帝のことを年号で呼ぶことも可能に（洪武帝や康熙帝・乾隆帝など）

→皇帝に関する諸制度の多くは日本に移入、諸説あるが天皇（^{てんのう}天皇）という称号は 600 年～700 年頃に成立（それ以前は「すめらみこと」や「おおきみ」、奈良時代でも天皇という字は「すめらみこと」と読んだ）、一世一元の制は明治時代に導入

・皇帝の家族

皇帝には皇后以外にも多数の側室や女官が存在、その生活空間＝禁中・後宮などと呼ぶ
→皇帝が居住し政治を行う空間＝宮城・皇城の最奥が禁中、政治は手前の宮殿で行う
→皇后の下で側室には、貴妃・美人・夫人・昭儀・嬪・婕妤など多数の称号があつてランク付けられており、王朝ごとに制度の変更がある
→皇后や皇太后の一族を外戚といい、漢代には権力を掌握し政治を壟断する者も

皇帝の息子を皇子、娘は公主（白雪姫の中国語訳は白雪公主）、公主を娶った人物を駙馬（晋朝では駙馬都尉に任じられたから）といい、皇子が王に封じられると親王という
→皇子のなかで皇帝の生前に特に後継者と指名された者を皇太子というが、皇太子は皇帝の脅威になりうるため、宋代以降は常には置かれなくなる

皇帝の一族（皇族）を特に宗室といい、皇帝に実子がいなかった場合は宗室から昭穆相当の者（世代が後継者として相応しい者）を選んで皇帝とする

→前漢では高祖の皇子の多くが王に封じられて国を持ったが、中央政府もその国内の政治に関与できないほど独立性が強く、西晋・東晋では皇族を政治家として重用するも、権力を持ち過ぎ、叛乱を起こしたり皇帝位を奪ったりするケースも
→宋代以降、宗室には年金が支給されて贅沢が許されるが、政治には関与させない傾向が強い（明初は皇子に帝国の防衛を担わせたが、永楽帝以降は実権を失う）

皇帝が生前に帝位を子に譲る禪譲を行うと、前皇帝は太上皇帝となるが、日本史上で上皇による院政が頻繁に見られたのとは異なり、中国史ではあまり見られない（中国の父の子に対する権力は大きく、太上皇帝が登場すると皇帝に強い影響力を持つ）

宗室の人物が皇帝位を継承した場合、新皇帝の実父をどう呼称するか、どういった称号を贈ればいいのかという新たな問題が生じる

→北宋の英宗の際は、実父＝濮王を皇考（皇帝の父）として祀りたい英宗と、礼制を守り皇伯（皇帝の伯父）とすべきとする官僚との間で論争＝濮議（濮王の処遇問題）

→明朝の嘉靖帝にも同様の問題、嘉靖帝は実父の興献王を興献皇帝として遇したかったが、多くの官僚は興献王を皇叔父とすることを主張、新進官僚が嘉靖帝に取り入り味方をしたため大論争に発展、最終的に嘉靖帝が自分の主張を押し通し、反対派を罷免・弾圧＝大礼の議

禁中では皇帝や后妃の身の回りの世話は宦官（去勢された男性）によって行われる
→宦官を使うことは皇帝の特権、明代では功臣の子孫には特別に使用を許された

・皇帝の権力

伝統中国は一君万民＝皇帝以外に民を支配する者は制度的にはいない、地方に派遣される官僚も皇帝から民を一時的に治める権限を預かっているだけ、数年に一度は異動があるため、その地を代々支配するような中間的な勢力は中国には存在しない

唐代以前の皇帝は、力をつけた臣下に脅迫・殺害されて王朝を篡奪（きんだつ）されることがあったが、960年に成立した宋朝以降は基本的にそうした事態は見られなくなる



皇帝のもとに軍隊の統帥権が集中、皇帝の手足となる忠実な科挙官僚の存在（科挙官僚は厳格な試験による採用のため、何代も続けて輩出することはできない）

- ◆唐後期から、あらかじめ定められた律令では対応できないほど社会の動きが活発化、日々起こる新しい事態に皇帝が素早く詔勅を降して問題进行处理する体制が必要に
→日常的な政務をも皇帝が前面に出て処理する政策決定の方式が宋代以降に制度化

・歴代の有名な皇帝

※漢の高祖＝劉邦（？～前195）生年は前256年説・前247年説あり

漢王朝の創設者、もともとは沛県（江蘇省徐州市）で治安維持に当たった小役人



やくざ者であったが人望があり、曹参・蕭何・樊噲・夏侯嬰・周勃といった市井のならず者たちのトップに

秦末に陳勝・呉広の乱が起こると、混乱に乗じて挙兵、旧楚国の復興の運動に参加、一軍の将に成長

←井波律子『中国侠客列伝』講談社学術文庫、67頁より転載

項羽と関中攻めで競争になるが、裏道から先に関中を落として秦を滅ぼし、王を名乗ったため項羽が激怒、決死の謝罪会見＝鴻門の会（高校の国語漢文の教材で有名）

項羽に許され漢中王となるが項羽に対して挙兵、連戦連敗ののち勝利して漢の皇帝に

劉邦が天下を取れた理由 ＝ 漢の三傑＝ 張良 ・ 蕭何 ・ 韓信

→張良は参謀として、蕭何は物資や兵士の調達・輸送などの行政官として、韓信は戦術・戦略に長じた名将軍として劉邦の対項羽戦争に貢献

→劉邦は自身の能力はともかく、配下の建言をよく聞き入れる広い度量を持ち、それが優れた部下の活躍を促し、天下統一につながったという評価も

ただし劉邦は漢朝を建国したあと、かつての部下たちの多くを誅殺（韓信も）、中央直轄領の郡＋劉氏一族が王として統治する諸侯国の郡国制（のちに諸侯国の力を削ぎ、全国を中央直轄化した事実上の郡県制に移行）

→明の太祖もそうだが、王朝建国後、個人的な紐帯関係を中核とした閉鎖的な組織から、普遍的な組織への脱皮のためにかつての仲間を粛清する傾向

能力的に問題があっても度量が広く、寛容な君主を、有能な官僚が補佐してもり立てていくという図式は、後世の中国の物語のなかにも定型的に取り込まれる

→『三国志演義』の劉備と諸葛亮、『西遊記』の三蔵法師と孫悟空、『水滸伝』の宋江と呉用などに典型的、優柔不断な君主と優秀な補佐役・汚れ役のコンビ

※唐の太宗＝李世民（598～649）中国史上の明君として有名、唐の2代目皇帝



曾祖父の李虎は西魏（鮮卑族の王朝）の武将、李世民も鮮卑か匈奴の血を引いていた可能性が高い

煬帝が反乱で殺害され、李淵が唐の皇帝として即位すると優れた武将として父を補佐

河北・河南に割拠する竇建徳・王世充などの強力な群雄を次々に撃破、唐朝の天下統一に大きく貢献

←布目潮風『つくられた暴君と明君―隋の煬帝と唐の太宗―』清水新書、口絵より転載

兄の李建世を長安の北門で殺害して皇太子の位を奪取＝玄武門の変、その後、父の李淵を強引に退位させて皇帝に即位

隋の法制・官制を継承し、律令制の基礎や三省六部制を確立

→律令制とは？：律は刑罰法、令は官制などの行政法、相互補完の関係にあり、裁判や行政などが厳格に規定された律令に則って運営される体制のこと

→三省六部制？：三省＝中書省・門下省・尚書省の各トップを宰相とし、各宰相の権限を分割、中書の立案した内容を門下が審議、問題なければ尚書に送り、尚書省に所属する六部（吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部）のうちその案件に関係する部から九寺に命令→施行

突厥の征伐に成功して天可汗（テングリカガン）の称号を得るが、朝鮮半島北部の高句麗遠征には失敗、四川での反乱を引き起こす

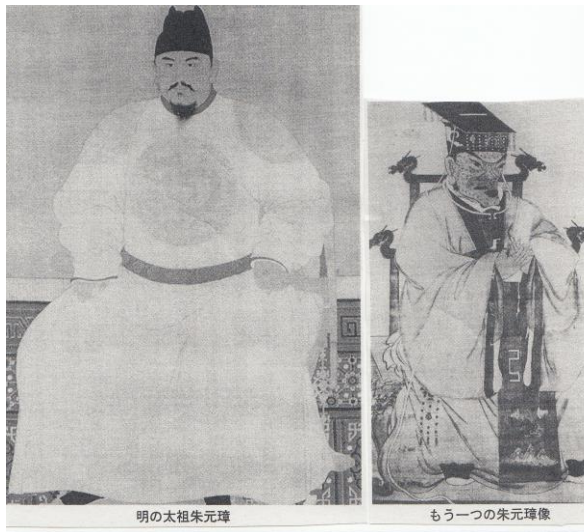
明君の代名詞である李世民と対照的なのが、暴君の代名詞である隋の煬帝^{ようだい}

→煬帝は兄を殺したこと、四度の高句麗遠征に失敗して人民を疲弊させたことなどが暴君の理由とされるが、兄を殺したこと、高句麗遠征に失敗したことは李世民にも当てはまる、明君と暴君の違いは結果論的な側面があることにも注意

→劉邦と同じく臣下の諫言をよく聞いたという評価もあるが、李世民を理想的な君主像として強調しようとした『貞観政要』の記述をそのまま信用することは危険

→ただし理想的な時代として、後世の君主の模範として意識されることが多い
(全国の地方官の名前を紙に書いて屏風の地図に貼り付け、常に人事に配慮した等)

※明の太祖＝朱元璋（洪武帝）（1328～1398）非常に有能な皇帝だが・・・



←二つ伝わる朱元璋の肖像画、朱元璋は異相であったことが史書に残っており、あるいは右の肖像画のほうが実際に近いのかもしれない

←檀上寛『明の太祖 朱元璋』白帝社、47頁・57頁より転載

清代の歴史家趙翼^{ちょうよく}は「一身において聖賢、豪傑、盜賊を兼ねた才物」と批評

もとの名を朱重八、濠州（安徽省鳳陽県）の貧農の子、家族を飢饉・疫病で失ったために寺に身を寄せて乞食僧になり、各地を流浪

元朝末期の紅巾の乱に乗じて挙兵、南京を奪取してそこを根拠に勢力拡大→江南統一

1368年に元朝の首都の大都（北京市）を攻略して天下統一、元朝は北に逃れて北元に

→様々な制度を独自に創設して300年近くにおよぶ明王朝の礎を築く、

→例：10年ごとに民衆の資産状況をチェックして帳簿に記し、徭役賦課^{ようえき}のための基準とした賦役黄冊、中国に伝統的な宰相制度を廃止し、六部を皇帝が直轄など・・・

→日本にも影響を与えた『大明律』も朱元璋によって制定、子孫よる改変を禁止

かつての部下たちを謀反の疑いで次々に肅清＝^{こいよう}胡惟庸の獄・^{らんぎょく}藍玉の獄

→本当に謀反を企んだのか否か史料からは不明、疑獄事件といわざるをえない

乞食僧であったため、光・禿・僧の文字を公文書で使った者が処刑されることも

4度の疑獄事件で犠牲者は数万人に及ぶとされるが、最近ではこれを明朝の国家建設のために必要な事件であったとする再解釈も

→明朝は統一王朝としては唯一江南から起こった、そのため当初は高官の多くは江南人で占められたが、江南人同士の癒着や汚職が官界に蔓延

→南人王朝から統一王朝への脱皮を目指す朱元璋にとってそうした事態は許せるものではなく、江南出身の有力官僚や大地主を大弾圧せざるをえなかったとする説

※清の世宗＝雍正帝（1678～1735）



清朝の3代目皇帝、先代の康熙帝には皇太子がいたが、康熙帝と皇太子が対立したため雍正帝が即位することに

皇太子の擁立によって内紛が起こるのを目の当たりにしたため、太子密建の制を創設

（皇太子を生前に発表せずにその名前を鍵をかけた箱に入れて宮殿の額縁の裏に設置、皇帝の死後、その箱を開けて後継者が初めて分かる方式）

←宮崎市定『雍正帝—中国の独裁君主—』中公文庫、口絵より転載

地方の官僚がしっかりと仕事をしているのかを徹底的に監視するため奏摺制度^{そうしやうせいど}を創設

→各省（広域行政区画）の担当官僚に、皇帝に対して日常的に奏摺による地方の状況報告や意見建白することを制度化、雍正帝はそれら奏摺の全てを閲覧し、自ら硃批^{しゅひ}（朱筆で記入された皇帝からの指示や返答）を書き入れ、各省の官僚に返送、これを繰り返す、雍正帝はこれによって地方の実情を把握し、政治の失敗や災害の発生を隠そうとする官僚を厳しく叱責、なかには「下愚は移らず」（愚者はどうやっても向上しない）という硃批を受けとった官僚も存在

満洲族が中華に王朝を建てたことを批判する漢人を論破、その漢人との言葉のやり取りを記録し、『大義覺迷録』^{たいぎかくめいろく}として出版、中華の皇帝としての強烈な自負

各地の地方官僚からの報告全てに目を通し、全てに返答を書き入れるのは大変な激務

→きわめて勤勉な皇帝だがその治世はわずか13年、過労死したとの説もある

・困った皇帝たち

※明の武宗＝正徳帝（1491～1521）



生来明敏であるが、馬術や弓術を好む派手好みの性格

15歳で即位するが、官僚たちが止めるのも聞かずに宦官の
りゅうきん
劉瑾を信任して政治を委ねる

劉瑾は自分に逆らう官僚を逮捕・投獄し、官位を売って武宗
のための新宮殿＝豹房（チベット仏教系の宮殿？）を建築

←三田村泰助編『中国文明の歴史 8—明帝国と倭寇—』中公文庫、242頁より転載

宦官に誘われて北京からお忍びで宣府（張家口付近）に行き、女色にふけったとされる

宦官同士の内紛で劉瑾を処刑したあとは、軍事に熱中（宮中で軍事訓練）

→自分に別人格の「鎮国公総督軍務威武大將軍総兵官朱寿」という官位と名前を付与

4度も大軍を率いて対モンゴル遠征を行う、大きな戦果はなかったがこれを楽しむ

→反乱鎮圧のために出向いた江南から船で帰る途中に運河に転落したことが原因で死去

※明の神宗＝万曆帝（1563～1620）



10歳で即位、しばらくは内閣大学士の張居正が改革を断行した時代、張居正は傲岸不遜な性格だったが、政治的には辣腕をふるい、国内外の政治に大きな成果を上げる

張居正の死後、政治を顧みなくなって内政が混乱（張居正の生前の不法行為への批判が高まり、これが心理に影響？）

愛妃の子を皇太子にしようとしたが、官僚や皇太后の反対で抑圧され、これも政治への意欲を削ぐ原因となったか？

↑三田村泰助編『中国文明の歴史 8—明帝国と倭寇—』中公文庫、306頁より転載

万曆三大征＝楊応龍の乱・ボハイの乱・朝鮮援兵（＝豊臣秀吉の朝鮮出兵）で財政が悪化、宦官を各地に派遣して重税を課したため、各地で民変が多発

政治への意欲を完全に失い、20年以上も宮中に閉じこもり、一度も政治の場に出てこなかったという不名誉な記録、宦官が万曆帝と外の官僚をつなぐ唯一の糸

※明の熹宗＝天啓帝（1605～1627）



父親の光宗が紅丸の案（皇帝が宦官の勧めた精力剤を飲み急死した事件）により即位 1 か月で死去したため即位

乗馬や武芸を好み、水からくりを見るのが大好き

宦官の魏忠賢を重用、全国に魏忠賢を称える祠が乱立

魏忠賢は皇帝に次ぐ存在とされ、九拝する必要があり、九千歳や九千九百九十歳と称する必要があった（万歳という言葉はもともと皇帝の長寿を祝い願う言葉）

↑ 三田村泰助編『中国文明の歴史 8—明帝国と倭寇—』中公文庫、368 頁より転載

木工細工の腕は名人級、宮中で建物を自分で造ったほか、半裸で朝から晩まで食事も寒暑も忘れて椅子づくりなどの細工作業に熱中、夕方までに完成しないと不機嫌になって作りかけの細工物を放棄

宦官は天啓帝が工作に熱中しているところに故意に政治の報告を行い、面倒がった皇帝からの一任を勝ち取る、魏忠賢らはこの手法で政治を操作した

→天啓帝の死後、後を継いだのは崇禎帝、明朝は崇禎帝のときに滅亡

※困った皇帝の話題は興味深い、単なる面白話では済まない

→上記 3 人の皇帝は明朝の皇帝、明朝では宰相制が廃止、行政の施行機関である六部は皇帝に直結＝皇帝が決済を行わないと政治が動かないシステム

→政治に関心を示さない皇帝が登場しても明朝は 300 年近く継続＝皇帝が無能でも政治・行政が機能しうる仕組みが形成されていたことを示す

→皇帝を補佐する存在として、明朝では永楽帝の時に内閣大学士が創設された

→内閣大学士は官僚たちから皇帝に送られる上奏文（意見建白書）を事前にチェックし、それへの返事（^{ひとう}批答）の草案（^{ひようぎ}票擬）を事前に作って皇帝に送る

→皇帝は票擬を参考に批答を清書するが、不真面目な皇帝は清書を宦官に任せる（明朝で宦官の政治介入が多発するのは、清書を任された宦官が意見するため）

→万暦帝が 20 年間一度も外に出てこなくとも政治は辛うじて回る、こうした政治制度は秦漢以降、どのような変化を経て形成されたのか？（→以下、次回へ）